

北海道 みなとまち紀行

室蘭編①

第 13 号

■室蘭編①

昨年の北海道は猛暑が続いたと思えば、10 月に入るや一足飛びに晩秋となる、まるで季節がこれまで受け継いできた段取りを忘れてしまったような一年でした。兎にも角にもすっかり寒くなってしまった 10 月の下旬、「国際拠点港湾・室蘭港」のみなとまち、室蘭市を訪れて室蘭港最奥部にあたる室蘭駅周辺の徒歩旅を楽しんできました。

札幌から室蘭への移動は、もちろん JR 北海道の「特急すずらん」を使いました。「特急すずらん」は室蘭に行くのにとっても便利な列車です（所要時間 1 時間半余り）。ただ昨春から自由席がなくなり、予め指定券を購入しておかなければならなくなったのが個人的には少し残念。それでも函館行きの「特急北斗」に比べて大きなキャリーバックをいくつも持ったインバウンドの観光客も少なく、東室蘭駅で乗り換える必要もないため、室蘭駅へ行くにはやはり便利な列車でした。また「特急すずらん」は東室蘭駅を過ぎると室蘭駅まで各駅停車になり、右手の車窓から室蘭ならではの風景、高い煙

突の工場群を眺めながらゆったりと旅気分になれるのもお薦めポイントです。そして母恋駅^{ぼこい}を過ぎると、室蘭線の終着駅・室蘭駅に到着です。列車は長いプラットフォームにゆっくりと滑り込んで行きました。

現在の室蘭駅（地図①）は平成 9 年（1997）に新築移転されたもので、今は無人駅になっていました。プラットフォームから続く通路を通って改札口に行くと、切符の回収箱が置いてありました。切符をそこにに入れて、駅舎を出ると、さあ、いよいよここから徒歩旅のスタートです。

【室蘭港は何故、天然の良港となれたのか】

突然ですが、室蘭港は自然の地形を利用した「天然の良港」として知る人ぞ知る港です。衛星写真からも室蘭港を形づくる白鳥湾が、絵鞆半島^{えとも}と本土陸地でガッチリ三方を囲まれていることが分かりますね。また大きな船が利用する港は、海面水域の広さや波の静かさに加えて深さも必要になります。室蘭港はそれらの要素をもともと自然が与えてく



「特急すずらん」の到着した室蘭駅のプラットフォーム



クジラ、イルカと白鳥大橋のレリーフ。右側に見える建物が現在の室蘭駅舎



室蘭港周辺の空中写真

(出典:「国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス」)

URL: [https://service.gsi.go.jp/map-](https://service.gsi.go.jp/map-photos/app/map?search=photo)

[photos/app/map?search=photo](https://service.gsi.go.jp/map-photos/app/map?search=photo))

れているので、全国にある天然の良港の中でも自然から最上級の恩恵を受けた港だと思っています。それではこのような地形はどのようにして出来たのでしょうか?「室蘭・絵鞆半島に 1,000 万年前の海底火山の活動の跡を見る(総合地質 第5巻 第1号、2021年10月)」によりますと、500万年前に絵鞆海底火山が隆起して測量山や母恋富士等の陸上火山が造られた後、海面上に顔を出したそれらの山と山の間に砂が溜まる砂州が成長して絵鞆島が本土と繋がって絵鞆半島が出来たとあります。このような地形は陸繋島と言われますが、天然の良港の原型はこのようにして出来上がりました。そして今回の旅のスタート地点の室蘭駅は、標高が海拔約2mのところであって、まさに島と島を繋げて白鳥湾を仕上げた砂の上に位置しています。このように天然の良港・室蘭港の原型、白鳥湾を形づくった太古からの歴史を知ると、ますます室蘭駅こそ室蘭港周辺をめぐる今回の徒歩旅の出発点としてふさわしいと感じてきました。

【室蘭駅からフェリーふ頭・中央ふ頭へ】

室蘭駅からまず向かったのはフェリーふ頭です。最初の訪問場所をここに決めたのには、いくつか理由があります。室蘭駅から近かったことはもちろんですが、なにより室蘭港の原点になる場所だと思ったこと、また私個人にとっても少なからず



みなとまちを感じさせる「入江運動公園陸上競技場」



あともう少しでフェリーふ頭に到着

ゆかりのある場所だったからです。途中、船を模したスタジアムエントランス前に灯台、スクリーンのモニュメントが置いてある「入江運動公園陸上競技場(日鋼室蘭スポーツパーク)」の横を通り過ぎると(地図②)、室蘭港と青森港を結ぶ「津軽海峡フェリー」の看板が見えてきました。もう少しでフェリーふ頭に到着です(地図③)。

さてフェリーふ頭を何故、室蘭港の原点の地と思ったのか。それは室蘭港の近代工業港としての始まりが石炭積出港としての役割であり、その本格的な開始場所が現在のフェリーふ頭の位置だったからです。



フェリーふ頭から見た「SEVEN SEAS EXPLORER」
～室蘭のシンボル測量山を背景に

フェリーふ頭からもその煙突などがよく見えましたが、室蘭は「鉄の街」のイメージが強いと思います。ただ炭鉄港推進協議会作成のパンフレット「炭鉄港 室蘭 歴史をめぐる旅物語」の室蘭の炭鉄港ストーリーの中でも冒頭に書かれているように、豊富な北海道炭を本州等へ供給する石炭積出港の役割から室蘭港はスタートしたと考えられます。当初はフェリーふ頭より北側のエトツケレップ（現在の御崎町）にあった^{みさき}棧橋から石炭が積み出されていましたが、明治22年（1889）に北海道炭^{たん}礦鉄道会社が設立され、その3年後に室蘭～岩見沢間に鉄道が敷設されて大量の石炭の陸上輸送が行えるようになりました。その後、明治39年（1906）に鉄道国有法により鉄道部門が国に買い上げられたこともあり、石炭海運業の性格も生かして、社名を現在の北海道炭礦汽船株式会社と改め、明治44年（1911）に現在のフェリーふ頭の位置に石炭積出高架棧橋を完成させ、一昼夜6,600tもの石炭を貨物船に積み込むことが出来るようになりました（「室蘭港建設史（北海道開発局室蘭港湾建設事務所）」より）。青森港との間を毎日結ぶ青函フェリーの到着の定刻が17:25のため、今回は残念ながらその船影を見ることは叶いませんでしたが、フェリーふ頭に実際に立って「炭鉄港 デジタル資料館」にもその大迫力の姿が掲載されている大棧橋を想像することは、この上もない旅の醍醐味になりました。

また、私とフェリーふ頭の縁ですが、実は亡き祖父がかつて旧国鉄の運転手をしており、太平洋戦

争の戦時下に蒸気機関車で幌内炭鉱など空知地方の石炭を室蘭港に運んでいた際に米国の戦闘機から爆撃を受けた話を子供の頃に聞かされていました。これまでも石炭積出港としての室蘭港のことが話題になると、時々祖父のことを思い出すことがありましたが、今回の徒歩旅ではゆっくりと祖父との思い出に浸ることが出来ました。

ところでこの日、青函フェリーの姿を見ることは出来ませんでした。フェリーふ頭の対岸にある中央ふ頭に接岸する外国クルーズ船「SEVEN SEAS EXPLORER」（総トン数：55,254t、全長：224m、全幅：31m、デッキ数：10、乗客定員：746名、乗組員数：548名）に出会えるという思いもよらぬプレゼントがありました。「SEVEN SEAS EXPLORER」は東京港発着の11泊12日クルーズの寄港地としてこの日室蘭港を訪れていたもので、次の目的地は釜山港とのことでした。クルーズの醍醐味のひとつに「大きな橋 梁下くぐり」というイベントがあります。きっと乗船客も白鳥大橋の下を通過する瞬間を楽しみながら室蘭港に入港されたと思います。また、室蘭港には世界最大級の大型旅客船を受け入れられる岸壁が白鳥大橋に程近い祝津ふ頭にありますが、中央ふ頭は市街地により近いので、見物客が楽しそうに旅客船と一緒に写真を撮る姿も見られました。

ここで少し室蘭港の歴史を振り返りますと、北海道開拓期、開拓使本庁の置かれた札幌と北海道の玄関口の函館を結ぶ「札幌本道」の整備が北海道



工場の煙突群が国際旅客船の背景にあるのも室蘭ならではの風景

開拓の一大事業として始められ、そのルートの中に室蘭港と噴火湾の対岸の森港とを結ぶ航路が位置付けられました。そして明治5年(1872)に木造栈橋が現在の中央ふ頭あたりに造られて、定期航路が開設されています。中央ふ頭は当時の国内向けの人荷を運ぶ役割をお隣のフェリーふ頭に引き継ぎ、今では海外からのお客さんを受け入れています。

クルーズ船を係留する岸壁が中央ふ頭の表舞台であるとするれば、ふ頭を挟んで反対側の岸壁には港の中のいわば黒子で縁の下で力持ち、マストをカラフルに塗り分けた4隻のタグボートが係留されていました。タグボートの役割は大型船の安全な入出港や係留の支援です。タグボートがいなければ大きな船が荷物を積んで室蘭港にやっても、また大型旅客船が海外のお客さんを乗せてきても、貨物の積み降ろしも乗船客の乗り降りも叶わないのです。4隻のタグボートはその重要な役割を果たす時をじっと待っているようでした。

ところでフェリーふ頭から中央ふ頭に向かう途中、入江臨海公園内の広場には石碑やモニュメントがあって、その中で「海に生くる人々 葉山嘉樹」と刻まれた石碑に出会いました(地図④)。ここを訪れた時、“葉山嘉樹”という名前すら知りませんでしたが、刻まれた言葉が室蘭港やみなとまちの歴史を深く物語っているようで妙に心に残りました。そして、この旅の後半で立ち寄った「港の文学館」においてその意味を知ることになるのです。後半の室蘭編②で、フェリーふ頭・中央ふ頭と巡った港を離れて、室蘭の街中を歩いて行きます(地図⑤)。【室蘭編②に続く】

(平澤充成 記)



自らの出番をじっと待つタグボートたち



心に残った「海に生くる人々」という言葉

【今回の散策ルート】



- ①室蘭駅舎 → ②入江運動公園 → ③フェリーふ頭（室蘭港フェリーターミナル） →
→ ④入江臨海公園 → ⑤中央ふ頭（中央ふ頭旅客船バス、タグボート係留岸壁）
- 室蘭編②の散策ルートへ

【今回の散策ミニ情報】

地図①

室蘭駅舎

室蘭市中央町 4 丁目 5-1

電話 0143-22-2382

※港と海をテーマにデザインされた平成 9 年(1997)建設の駅舎。高さ 16m の柱が立つ待合室は円形の吹き抜け構造。イルカとクジラウォッチングで新しい室蘭の魅力を発信するモニュメント「クジラたちの祝福」は白鳥大橋の開通を祝って設置された。

地図②

入江運動公園

室蘭市入江町 1

電話 0143-25-2574

(室蘭市都市建設部土木課)

※全天候型の舗装トラック(1周 400m)を 8 コース完備した陸上競技場の他、温水プールや体育館、テニスコート、子供の広場などがある公園。寄付されたシンボル彫刻像も多数設置。

地図③

フェリーふ頭

室蘭市入江町 1-50

電話 0143-83-4080(津軽海峡フェリー)

営業時間 9:00~21:00(季節変更あり)

※室蘭港フェリーターミナル施設には、室蘭のシンボル「白鳥大橋」を望む待合室、授乳室、インターネットブース(無料 Wi-Fi 対応)などが完備。売店・食堂はない。

地図④

入江臨海公園

室蘭市入江町 1-8

電話 0143-25-2574

(室蘭市都市建設部土木課)

※室蘭港にゆかりのある記念碑が7つ建立されている公園。夏の花火大会を見物できるスポットで知られる。

地図⑤

中央ふ頭

室蘭市海岸町 1 丁目 20-30

電話 0143-22-3191(室蘭市港湾部)

※中央ふ頭には、平成 11 年(1999)に道内初となる水深 9mの旅客船専用バースが完成し、飛鳥Ⅱ、飛鳥Ⅲほか国内外のクルーズ船が多数係留している。なお、白鳥大橋の下を航行することができない大型のクルーズ船については、外港側にある崎守地区及び祝津絵鞆地区の大型岸壁を利用している。

<連絡先>

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構

札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階

e-mail アドレス mail@minatobunka-npo.info

ホームページ <https://minatobunka-npo.info>